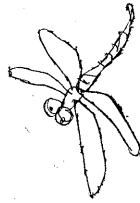


なぜあせるのか



アニー・L・バトラー

（アニー・L・バトラーはプロミネントン、インディアナ大学幼児教育学助教授である。）

四・五歳児に形式化された教育法の必要を感じているのは誰なのであろう。両親か、教師か、それとも子どもたち自身なのか。幼児の成長発達の基本型は変わったのであろうか。ゆきとどいた教育をなし得る児童数と設備教材がととのった、機能的な教室をそなえる責任をとるのは誰なのか。学校カリキュラムの各分野に、十分貢献し得るだけの資格ある教師をととのえるべく奔走するのは誰なのか。教育専門家か、それとも一般市民か。

今日、新聞やテレビにとりあげられるニュースを見ると、その

ほとんどといってよいほど、「スピード」がいかに現代生活の中で重んじられているかということに気がつかせられる。わが科学者たちは、宇宙飛行の成功をそのまま人類の月世界征服への里程表と考えている。国をあげてわれわれは、この宇宙開発の成果とライバルであるソ連と比較し、一步も劣るまじとがむしゃらである。翻って家庭生活を見るに、家庭もまたこの慌しさのとりことなっている。すなわち、父親は毎朝仕事に急ぎ、母親は子どもたちをせかして学校へ送り出し、そして自分も仕事へととび出すのである。

父親の誇り高き母校に入学するために、級友としてのぎをけずる高校生はいうに及ばず、中学校、小学校を通じて現代の子どもたちには、より速く学習すべく期待がかけられている。幼稚園の教師もこんなつぶやきを聞くと、あせりを感じずにはいられない――

「何でこんなに遊んでばかり。時間がもったいないじゃないの」

「この子はとても頭がいいんですよ。もうそろそろ机の前にすわってちゃんとした勉強をはじめてもいいのに」

多くの人々は、より形式化した教育方法や小学校教育内容を幼稚園教育の中に移行し、かつてに四、五歳児の教育構想を打ち立てるのである。その結果幼稚園の教師は心ならずも、子どもたちがもっている知識や思考の芽を伸ばす機会や、生まれながらにして持つ学習の喜びを自分で感じる機会を奪い、代りにすべての子どもに等しく教える既製のレディネス養成の教材を与えることになる。

――さまざまな経験から学習する――

子どもの学習に対するわれわれの関心事は変わった。まったく、幼児はわれわれおとなを驚嘆させる。宇宙船打ち上げのたびに湧く興奮や飛行状況をおとなにまじって一人前に感知しながら、

ら、達者な口調で軌道の衛星や宇宙飛行士のことをしゃべりまくる。隣りの町のことより、ケーブカナベラルのことの方をよく知っているありさまだ。

現代の五歳児は、われわれがずっと後の年齢で苦心しながら学んだような科学的概念を、もういくつか理解しているように見受けられる。そう、少なくとも用語の使い方は正確だ。今や宇宙一てんばりの時代に生を受け、彼らのことばは宇宙時代語ともいえようか。ひと頃前の幼稚園では、子どもは防空壕をつくり爆弾を落とし、おまけにおとなたちが名前も知らぬ飛行機の型をいい当てることができたものであった。当時の教師や両親は、この攻撃的な行動や敵意の表現に関心を集め、幼児の感情生活がこれによって永久に破壊されてしまうのではないかと案じたものであった。しかし知的能力は当然のものとしてうけいれ、心配もしなかった。

今日われわれは、当時とはまた異なった時代の波に迫られている。幼児の行動に対しても、これまであまり問題にされなかった面に目をとめ、評価検討するようになった。今日の五歳児は過去の五歳児に比べ、たしかにある物事については速く学習し得るようになった。

しかしながら、成長発達の基本的パターンはほとんど変化していない。子どもたちは、さまざまな異なった経験を通して学習し

得るのである。

子どもたちの学習方法を形式化し、学習の機会を制限することによりよい教育だと考えるならばそれは、個人的な好みと、実質的な教育とを区別する能力に欠けているためと考えねばならないであろう。われわれのなすべきことは、子どもの経験領域を縮狭して学習の機会を阻むのではなく、子どもの学習可能の場をできる限り広めることに外ならないのである。

—教育の早期形式化は誤まっている—

近來世界制覇の競争にともなつて科学、数学、外国語に強調点がおかれるようになったが、これがかつてなかったほどおとなたちに、自分自身の教育の不十分さを意識させるに至つた。この意識はやがておとなたちを「これからの子どもに同じ失敗をさせてはならない」との強い決意へと追い込んだのである。子どもが少しでも早くよい職につき、立派な地位を得、十分な経済力で現代科学の粋を集めた新製品を片っぱしから手に入れるためには、どうしても学業を早くはじめなければならぬ——口でこそいわぬが、おとなたちの間にはこんな感情が流れているのだ。教育の早期形式化は、より大きな能率と理解をとまなう、理想的な学習効果を保証するものという、誤まつた解釈がなされてしまったので

ある。

こんな状態のもとにあつては、一体なぜ子どもが幼稚園期に学業の基礎的教科を教えてもらえないかとたずねるのも無理はなからう。そうすれば子どもは、この膨大な知識体系を少しでも早く身につけはじめることができるではないかというわけである。一方子ども側の側に立てば、誰が一体こんなものを必要だと思つていのかとの質問が出てくるのも自然である。両親か、教師か、それとも子どもなのか。

大多数のこたえはこうである——子どもは好むと好まざるとにかかわらず、こうした勉強はいずれしなければならないではないか。ほとんどの五歳児は無限の知識欲を示すものであるが、形式化された学習への興味はまだほんのわずかにすぎない。われわれは子どもに基礎教科修得のことをとやかくいわなくても、いくらでも彼らの知識を發展させる方法は考えられるはずである。子どもがその期に到達していない前から技術を覚えろとせき立てても、それは子どもが自分のペースで十分な成長をする権利を剝奪するものも同然である。これが子どもたちの学習に対する自己概念と態度の形成にどんな大きな影響を与えるかということは、厳密に考察されて然るべきである。

われわれはともすると、究極のところ何を学び取るかを決めるのは子どもも自身であることを忘れてゐる。子どもが学び取つたも

のは、われわれが教えたと思つてゐるものと、全く異なつたものであるかもしれないのである。もし教室に重苦しい圧迫感が充滿していれば、たとえ教師がどんな立派な教育目的を持つていても、それは価値がなくなつてしまふ。子どもたちは、十把一からげの型にはまつた学習を強制されて、恐れや不信、また圧迫感を覚えるであらう。子どもの学習成果は、家庭や学校に広がる不安の間接的な結果であるかもしれない。

教材をやり終えることにあくせくして、物事の（ある子どもにとっては未知の、またある子どもにとっては既知であるかもしれない）探究過程に経験する喜び、スリル、そして達成感は失なわれてしまふであらう。われわれは、四、五歳児が終局的に学び取るものを予知することはとてもできないのである。われわれにできるのは、彼らの学習意欲を盛り上げ、思考力がさまざまな方向に発達するように助長し、学習目的達成を促進し、そして、彼らが学習途上避け難い失望に直面する時には支えの手をさしのべてやることである。子どもが、学習活動に拍車をかけることができるためには、先ず彼自身学習に取りくむ意欲を感じなければならぬ。われわれが幼稚園で早く教えよう、教えようとすれば、それは子どもの自発的な「やろう」とする気持をおびやかすことになる。それなのに、なぜそんなにあせるのか。

—子どもは独自のペースで学習する—

この「急げ、さもなくばとり残されるぞ」とでもいいたげな現代家族の足なみは、幼児（三歳〜六歳）の自然なテンポとはおおよそかけはなれたものである。子どもが自分で雪ゴートを着るのを待つ時間などとてもないから、誰かが着せてしまふ。昼食のしたくができれば、前ぶれもなく子どもの遊びは中断される。めずらしいショーウィンドに目をとめる暇もなく、子どもは行きたくない所へ行くために文字通りおとなにひきずられて行く。

良い幼稚園の特質のひとつは、子どもがさまざまな活動や学習を自分のペースに合わせて行なうことができることにある。例えばアレは、一冊の本を十五分かけて、挿絵のこまかい部分にまでひとつひとつ気を配りながら見る。一方ジムはこの同じ十五分間に、本をばらばらとめくつて見終わると、積木の汽車に乗り、次に絵をかくという移動ぶりである。やがてジムは「お十時」に間に合うように手を洗うために遊びを中断するのだが、それでもまだ彼には、石けんいじりをしたり、鏡の前でしかめつらをして見たりする時間が計算に入れられてなければならぬ。おそらく彼は手をふくのもどかしく、ぬれ手にペーパータオルを持ったままおやつテーブルへ直行し、ペーパータオルを捨てに

屑かごに逆もどりするという事態も起こるであろう。

この二人の子どもは、その時には同じでなくても、結局は読み、書き、算数を修得するようになるであろう。実に彼らは、異なった道順を経て学習するのである。この道順は、外見的には能率的に思えず、学習成果も明確でないかもしれない。それにもかかわらず、レディネス養成のための形成化された教材をやらされた子どもは、読みの学習に直面する時、教材による形式化された準備活動のなかった子どもと比較して、すぐれていないのである。(注1)

学習には長い時間がかかるものである。形式化された学習に集中することができるようになる前に、子どもは先ず成長するため時間を必要とする。また、いろいろな材料を使う方法を覚え、人々と親しく交わり、新しい経験を心ゆくまで味わうのに、時間を必要としている。

—子どもを広い視野から理解しよう—

幼稚園教師の視野を広げるための一方法は子どもひとりひとりをじっと見つめて、その個性の差をあるがままに認めることである。すべての五歳児がおたがい共通のニードを持ちながら、各自を他の五歳児から歴然ときわ立たせるものがある。

いく人かの五歳児は字が読めるだろう。他の五歳児は積木で非常に手の込んだ美しい建物をつくることができる。ある子どもは尽きることない想像力で劇遊びを盛り立てるのだ。その子どもは、先生にたびたび本を読んでたのむ。後で彼の遊びや質問に注意すると、いかに彼が既得の知識のうえに、新しく得た知識をこなして行こうと努力しているかがわかるのである。

字が読める子どもは幼稚園ではむしろ本を読もうとせず、もっと社会的な、創造的な活動を選ぶこともある。その方が新しい、また、別の種類の経験を与えてくれるからだ。子どもは数多くの才能を持っている。(注2)もし、これらの才能が早く発見されるなら、子どもの抽象的学習や課題達成へだけだけまじになり、役に立つか知れない。子どもの中に、すでに明らかな興味や才能があればそれをのびし、能力の目立たぬ子どもには、成長発達を促す分野を広めてやり、緊張が取り除かれて、のびのびと創造的活動が行なわれるようなふんいきを作りだす—これらのことができる幼稚園の教師は、まことに羨むべき立場にあるといわれてよいであろう。

幼稚園教育形式化への圧力を、各地区の学校設立計画にたずさわる教育専門家や一般市民の責任という観点から検討すると、異なった性質の問題が出てくる。行きとどいた教育をなし得る生徒数と設備教材がある—こんな機能的な教室をととのえるのは誰の

責任なのか。学校カリキュラムの各分野に、十分貢献できるだけの資格ある教師をととのえるのは誰の責任なのか。各々のクラスに、また学校に適したプログラムを立てるのは誰なのか。もしわれわれが、各自の責任をしっかりと見きわめ、遂行して行くならば、幼稚園教育形式化への圧力をひき起こしているこの「せり」は、やがて、より良い教育実現への「急ぎ」に変わって行くにちがいないのである。

1. W. Paul Blakly and Erma M. Shadle, "A Study of Two Readiness-for Reading Programs in Kindergarten", *Elementary English*, #38, November 1961, pp. 502-505.

2. See ACEI's, *All Children Have Gifts*.

質問の余地もなく、各ナースリースクールや児童福祉施設のふんいきのいかんは、教職員、殊に園長の資質によるといえる。園長その人こそ、子どもたちが生活し、呼吸し、その存在を得るべきふんいき作りをするのである。

この「手で触れることのできないふんいき」がいかに子どもたちに影響しているかを測定する手がかりを、披露しよう。よく子どもたちを観察してごらんなさい。

彼らは各々の活動に夢中になって没頭しているか。

彼らは人間らしく行動しているか、それとも命令を待つ操り人形のようなか。

彼らの表情は豊かでいきいきしているか、それとも退屈そうで気力がなにか。

部屋は健康な活動や会話がかもし出す音でいきづいているか、あるいはピンが落ちても響くほどの静けさが要請されているか。

子どもからの質問にはちゃんと耳が傾けられ、誠意をもって答えられているか。

子どもたちはきげんよく楽しそうにしているか。

彼らは個性を持つ人間として評価されているか、あるいはただ自動人形としてしか見られていないか。

彼らはいろいろなものを試し、誤りをし、自分自身の判断を精いっぱい働かせる機会が与えられているか、また彼らの技術や自制力を発達させる機会はどうか。

彼らの独立心は助長されているか。

彼らは個性を自由に表現することが許されているか、それとも常に先生が示すただひとつの方法しか正しいとされていないか。

心も身体も感情もののびのびと羽をひろげているか。それとも便宜的な一せい教育のわくの中にきちんとお行儀よく閉じこめられているか。——コーネリア・ゴールドスミス

(子供の教育、一九六四年三月、三四四頁)

(東洋英和女学院短期大学・芝 恭子訳)